



『当たり前』の存在』

高知県

土佐町少年剣道

中学3年生

近藤 亜実

私は、小学2年の時から剣道を続けてきました。今思うと、ここまで続けられたのは、一緒に稽古をしてきた仲間、厳しい中にも愛情を持って指導を下さった先生、いつも励まし応援をしてくれる先輩や地域の方々、そして、毎日くじけそうになる私を支えてくれた家族、こうした周りの人々の力があつたからだと思います。

私は、小学生の頃は体も大きく、日々の剣道がそれほど苦しいとか、辛いとは思うことは無く、少し自信もありました。ところが、中学生になると、稽古の量、濃さ、ランニングや筋力トレーニングなどに私はついていくことができなくなりました。もともとあまり体力が無かった私は、すぐに息が上がり、筋肉痛で毎日泣きながら稽古をしていました。一つ上の先輩たちが普通にできていることができない悔しさと辛さで逃げ出したくなることもありました。練習を終え、暑さと苦痛と涙で顔を真っ赤にして帰りの車に乗ったとき、母はいつも、

「お疲れさま、大丈夫？」

と、心配して聞いてくれます。私は（大丈夫なわけないやん。）と思うけど、

「うん、大丈夫。」

と返事をしながらいつも車の後ろで泣いていました。私は、そんな母の言葉に安らぎを感じていました。

遠征の後などには、父や母が練習試合の内容などを色々と聞いてきます。道場の剣道教室で少し剣道を習っていたせいか、「どうして。」「なんで。」とか聞いてくるので、

「どうでもえいやん。ほっといて。」

と、反抗する時もありました。

2年生の夏、県総体の帰りに、私は父の車で泣き崩れました。1年生の時、決勝で負け、逃してしまった全中に、今年こそはと望みましたが、その夢はかないませんでした。負けた悔しさは、1年生の時の何倍にもなっていました。父の車に乗った瞬間、声を出して泣きました。父の前で泣くことはそれまでなかったので、とても驚いたと思います。父は何も言わずそっとしておいてくれました。その時、父の優しさとぬくもりをすごく感じました。

3年生になると、どの大会も最後になり、責任とともに焦りも感じるようになりました。親の「がんばって」の一言にもプレッシャーを感じ、試合でも思うように動けない状態になりました。そんな時先生に、

「試合の緊張感を楽しめ。」

と言われました。難しいとは思いましたが、緊張も自分の力として試合に臨むことだと感じました。そうすると、少し楽になり、周りの応援も自分の力にして試合ができるようになりました。いつの間にか焦りも自然となくなっていました。

結局、全中という夢はかないませんでした。仲間と行った日本武道館での全国大会は私にとって素晴らしい思い出となりました。

私にとって、これまでの8年間の剣道は、両親とともに歩んできたものです。いつもそばにいて当

たり前のような存在でしたが、今思うと、私が苦しんでいた時に一番苦しかったのは両親だったのかもしれない。そんな両親に支えられ、甘えることができたから、私はこれまで剣道を続けてくることができました。私は、これからも剣道を続けていきます。また両親には甘えることがあるとは思いますが、感謝を忘れず一緒に頑張っていきたいと思います。